

世界史B（2年） 4/13～17の学習内容③

第2回「ローマ＝カトリック教会の成長」

1年の授業でとりあげたローマ帝国の後半、コンスタンティヌス帝が、「ミラノ勅令」を發布して、キリスト教を公認しましたね。

コンスタンティヌス帝って、資料集に出てくる、あのすごい目力の人ですよ。右に写真も載せてみました。

この彫像、僕はローマの美術館で見ましたが、頭だけで2mぐらいある像です。皇帝のすごさを民に知らしめるよう、威圧感のある像にしたんでしょうね。



様々な国家を征服してきたローマは、税さえ納めれば、異民族の宗教に対しては寛容でした（勢いのある集団は大体寛容で、衰退過程にある集団は排外的になる傾向があります）。ところがキリスト教は「一神教」で、ローマの伝統的な宗教も含めて、様々な宗教儀式に参加することを拒否したので、それまでは弾圧の対象になっていたのです。

ところが、コンスタンティヌス帝という強力な指導者がキリスト教を支持したことで、キリスト教の勢力は大きく拡大していきました。392年にはテオドシウス帝によって国教に定められるまでになり、他の宗教は厳禁されてしまったのです。

コンスタンティヌス帝の時代まで、キリスト教徒の間には様々な宗派があったのですが、コンスタンティヌス帝が開催した「ニケーア公会議」において、「神とキリストは同質」とするアタナシウス派が正統とされ、「キリストは人間」とするアリウス派が追放されました。

これ以降、アタナシウス派の聖職者たちによる組織「キリスト教会」は、帝国の中で大きな影響力を持つようになったのです。「教会」とは、建物のことでなく組織のことを指します。

教会組織は帝国の各地に拡大し、帝国の末期には五つの主要都市に「五本山」という拠点が作られました。

中でも大きかったのが、西ローマ帝国の中心であるローマ教会と、東ローマ帝国の中心であるコンスタンティノープル教会でした。（資料集P741。あと3か所は、キリスト教の聖地イェルサレム、食料豊富で地中海交易の玄関口であるアレクサンドリア、アラム人の時代から陸上交易の重要地域だったシリアのアンティオキア。）

ところが、東ローマ帝国がゲルマン人の移動を凌ぎ切って生き残った（いわゆる「ビザンツ帝国」）のに対し、西ローマ帝国は476年に滅亡してしまいます。

すると、ローマ教会の指導者たちは、自分たちを守ってくれる政府を失ってしまうことになるんですね。これは困る。ケンシロウの出てこない、北斗の拳みたいなものです。「水と食料を渡しな、ヒャッハー！」とかいう、モヒカン男がうろつきまわる世界です。皆さん、ご存じないですね。

一応、ビザンツ（東ローマ）皇帝が直接の保護者なのですが、何しろ遠くにいたので、非常にたよりない。ゲルマン人もこの時にはキリスト教を受け入れる部族が増えていましたが、その多くはローマから追放されていたアリウス派でした。

そんなわけで、ゲルマン人の中に取残されたローマ教会は、ゲルマン人たちへ向けて熱心にアタナシウス派の布教活動をはじめました。自分たちの生き残りがかかっているのです、必死です。だから、フランク族を統一したクローヴィスがアタナシウス派に改宗してくれたことは、ローマ教会にとってもローマ系知識人にとっても、心強いことだったと思います。

やがてローマ教会は、「五本山の中で最も偉いのはローマ教会」と主張するようになります。箔付けをした方が、ゲルマン人もいうことを聞いてくれるような気がするからでしょうか。ローマ帝国の前半にネロという皇帝がいて、これが人格崩壊ものの大悪党だったわけですが、イエスの直弟子だったペテロという人が、このネロによって、ローマで処刑されているんです。ローマ教会の指導者は、「我々はペテロの後継者」と主張して、自ら「教皇」と名乗るようになりました。

こうして微妙な関係になった東西ローマ教会が決定的に不仲になったのは、726年にビザンツ皇帝のレオン3世が、「聖像禁止令」を出したことでした。右の金貨の人です。昔の少女漫画の人物のように、おめめがつぶら・・・。

もともとキリスト教は、彫刻の文化が発展していたローマで拡大したこともあって、偶像崇拜には寛容でした。

ところが、7世紀に厳しい偶像崇拜を推し進めるイスラーム教徒が登場し、ビザンツ帝国はエジプトとシリアを奪われるなど、散々な目にあいます。これじゃいかん、と反省して、聖像を使った宗教活動を禁止したわけなんですね。

偶像、ダメ、ゼッタイ！



ところが、体を張ってゲルマン人に布教しているローマ教会は、これに大反発します。文字が、難しい言葉も理解しないゲルマン人相手に一番効果があるのは、美しく飾られた聖人の絵や彫刻を見せて、これを崇めるといいことがあるよ、と訴えることでした。

ローマの教皇はビザンツとの不仲を強め、代わりの保護者をさがすことになります。どこかに私を守ってくれそうな人はいないかな・・・

いた！

あの人ですよ。あの人。

自分の君主をむりやり引退させ、フランク王国を乗っ取ったカロリング家の宮宰・・・ピピン！彼は彼で、自分が王位を奪ったことを正当化する権威を持つ人を、探していました。

当時の教皇は、「より強い者の方が王にふさわしい」と公に宣言してあげます。「右の頬を打たれたら左の頬を出しなさい」という教えのキリスト教徒の長が、それでいいんですかね。

ともかく、ピピンはそのお返しとして、教皇をいじめていたイタリアのランゴバルド王国（非キリスト教国でした）をやっつけ、ラヴェンナ地方を教皇の領土として寄進してあげました。ひどいやつばかりです。教皇は、宗教団体の長から、はれて一国一城の主、「領主」になったのです。この領土を、「教皇領」と言います。（資料集 P138¹の、オレンジ色の範囲）



そしてこの後も、教皇とカロリング朝のフランク王国はさらに結びつきを強め、二人三脚で西ヨーロッパ世界の基礎を築いていくことになります。

